

編集部からの  
問題提起に  
応えて

# 「日本赤軍」の解散について

★丸岡修／1001年七月一八日

## 一、積極的意味での「解散」

解散自体に、私は何ら異議も違和感もない。私自身が数年前から「武闘の停止を宣言せよ、日本赤軍の名称を変更させよ」と広言してきた。厳密に言えば、私の言っていたのは「解散」というよりも「再編」であつたが、名称の変更といふ意味では「日本赤軍の解散」ということではある。積極的意味における解散としてだ。

その表明は組織の代表である重信同志の被拘束以前にさるべきであった。遅きに失した。

## 二、消極的意味での「解散」

残念ながら、今回の重信同志被拘束をめぐる問題の後では、消極的意味でも解散以外にはない。重信同志が犯した誤りは、そのまま私たち旧日本赤軍の誤りである。

### ①誤りの第一

誤りの第一は、重信自身のモットーであり、私たちのモットーもあるはずの「最悪事態を想定して最善を尽くす」の結果の被逮捕ではなかったことである。

私自身の一九八七年の被逮

### ②誤りの第二

が進んでいくうちに、公安当局の力を過小評価するようになり、最悪事態に備えた活動

## 四、解散声明について

世界多地で多くの同志たちが（党員及び非党員）が拘束された。九六年までの敗北の教訓から、私は一九九八年に救援会誌の『ザ・バスポート』に次

の戒めとせよ、「白色地区で赤色地区と同じような活動をすることは許されない。白色地区でフロッピーディスクに重要文書を残すなど言語道断である。同じ誤りを繰り返すな

りを繰り返した。正に、革命組織の看板を降ろすしかないの

である。（私たちは、レバノン

の失敗を他人事とせず、自身の失敗を他人事とせず、自身の戒めとせよ」、「白色地区で

赤色地区と同じような活動をすることは許されない。白色地区でフロッピーディスクに重要文書を残すなど言語道断である。同じ誤りを繰り返すな

りを繰り返した。正に、革命組織の看板を降ろすしかないの

である。（私たちは、レバノン

の私への伝言によれば、連絡をとれる範囲での皆の総意として用意されていたが、早急に宣言する予定であった。その前に重信が拘束されたのである。内部的にも対外的（社会的）にも、彼女が「赤」の代表と

### ①重信の独断か否か

たとえ組織代表であつても、組織つまりメンバーの総意を無視して代表個人の意志を無視して代表個人の意志を出すのはおかしい」という友

人のもいる。

友人たちは、前述の規約を定としては正しい、と言うだ

い。しかし、獄中同志たちから

は「ならない」とするもので規定としては正しい、と言つた。だから重信が個人名で宣言するのはおかしい、と。実は、それ

は私たちにとって二番目の根拠であり、一番目の根拠は違

う。少なくとも私が一九八七年に拘束されるときまでの

「赤」の規約によれば、である。

私は人民革命党の規約を未だ知らないが、一九九一年まで信頼するとした上で、日本だけではなく世界の階級闘争の規約では、「赤はML主

### ②誤りの第二

して用意されていたが、早急に宣言する予定であった。その前に重信が拘束されたのである。内部的にも対外的（社会的）にも、彼女が「赤」の代表と

裁判の確定時に、諸決定はすべて同志たちに委任すると伝え

て、重信が宣言する形を

とったとのことである（私は

この丸岡修さんの投稿

は、「解説資料集」に掲載予定の内部向け文章として執筆されたものですが、「自由に扱つてもらつていい」との申出を受け、論議の一環として掲載したものです。

## 三、今回の事態で総括すべき点

私が一九八八年に、そして私

八年に菊村氏、「よど号グル

物が多く押収されている。そ

### 四、解散声明について

のことに敏感な同志だったの

に、どうしてかと思う。

物が多く押収されている。そ

### 五、今後の事態で総括すべき点

志が一九八八年に、そして私

まで投書等が続けられた。編

集部からの批判の趣旨は、次

### 六、今後の事態で総括すべき点

志が一九八八年に、そして私

まで投書等が続けられた。編

集部からの批判の趣旨は、次

は人民（の闘い）を支援する]等は、「赤」の口先だけの建前ではなく、実践のモットーである。その基準が同志一人一人に徹底されていたら、否定する行動をとつたといふ点においても、私たちに使つていいか悪いかの答えは明白。党员一人一人の行動に

者」の身分利用である。重信自身は知らなかつたようではあるが、少なくとも担当者は知つていたのであり、それは取りも直さず個人の責任というより、私たち組織全体の責任である。もちろん、代表である以上、重信自身がその存在意義を守るために、権力から被害を受けていたのである。弁護士を通じて、むろん、代

たちは無関係だが、一九八八年に菊村氏、「よど号グル

たちは無関係だが、一九八八年に菊村氏、「よど号グル